



さゆりっ子

子どもが遊び、学ぶ環境

すずらん組さんが「寒天あそびをしよう」の活動を公開しました。



1. 50の紙パックを手でとんとんとするとスルッと飛び出してきた寒天のかたまりに「エ〜!」と驚きの声を上げる園児たちは、その瞬間から目の前の寒天にぐんぐん引き込まれていきました。パックの形のまま、見事に立っている様子にはまわりの子たちも思わず席を立てて見に来ていました。

自ずと手を伸ばして「触っていい?」と先生に聞きたくなるのもよくわかります。ゴーサインが出ると一斉にその感触を楽しみ始めました。「冷たい〜!」と温度のちがいに驚く子、ぐちゃぐちゃにして「気持ちいい〜!」とその手ごたえを楽しむ子と一人一人が自分なりの接し方で寒天との距離をぐ〜んと縮めていきました。中には思わず口に入れてみようとする子もいて、あわてて止めに入る場面もありました。今までの生活とのつながりから「食べてみよう」とするのも当然予想される姿でしたが、びっくりさせられた一幕でした。グループ数分の紙パック寒天を用意してくれた先生のおかげでこんな素敵な出会いができました。



更に先生は子どもたちが楽しめる環境を準備して

いました。スプーンで個人の容器に青色の寒天を移し、細かくして遊んでいると自ずと赤色の寒天を混ぜ始める子が出てきました。すかさず、先生も「2つの色の寒天、混ぜている子もいるよ。」と全体に促していました。今までの感触遊び、色水遊びの様子から「混ぜる」遊びは必ず子どもたちがしてくるだろうと予想し、この日の寒天も「青色、赤色、黄色、緑色…」と用意していました。「色水みたいに混ぜたら色が変わるかな?」と混ぜる遊びに調べてみたい目的が生まれると、さじで混ぜる手を止めては色が変わってくるかを楽しみに覗いている子たちの様子は理科の実験をしているようでした。





最後に紹介したのが「風船寒天」。水風船に水の替わりに寒天が入れてあります。ぷにゅぷにゅしている風船寒天は、落としても全然跳ねません。「串で刺してごらん。」で子どもたちが慎重かつ大胆に串先を風船の表面に当てると突然、寒天の丸い塊が現れました。「風船は？」よりも丸い寒天を思わず手の平に載せて「面白い!」と目を凝らしていました。どんな形にも固まるんだなんて心の中に浮かんでいる子もいたことでしょう。「この寒天は何にも色がついていないんだよ。」ともとの半透明な様子を紹介してくれることで始めに見た寒天の色、混ぜてみた寒天の色、何もしてない寒天の色とどんどん見方が広がっていく子どもたちでした。

＜環境を通して行う教育＞

今回の寒天遊びは「夏だから、冷たい遊びをしたい。」という生活感あふれる子どもの声から生まれ、そして今まで「食べたことのある」寒天を敢えて手で触れる、細かくする、違う色の寒天を混ぜる等を通して寒天とのおもしろいかかわり方を探っていきました。いままで出会った砂、泥、紙、片栗粉と比べたり、クレヨン、絵具の混色遊びと関連して考えたりして、自分なりに寒天をとらえ直していきました。生活を通して身近な環境からの刺激を受け止め、自分から興味を持って主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わう幼児教育で大事にしたい「環境」を通して行う教育をじっくりと考えさせてもらえる機会になりました。

お手伝い（7/26）

夏休みのお手伝い、何にしようか？家族で話題になったときに浮かんだのが「スズムシの世話」。上田南幼稚園さんから孵化したばかりの幼虫を30匹ほどいただけてきた。夏休み明けにはさゆり幼稚園に持って行ってみんなに見てもらおうと思っている。まだまだ米粒くらいであるが、わさわさと動いているのがわかる。家に持って行ったときから孫は「何々。」と覗き込んで興味を示していた。霧吹きで水を上げるときには「やらせて、やらせて。」の連呼。初めての時は、水槽から離れすぎではないかと思うところから盛んに霧を吹きかけていた。そして餌のキュウリを交換するときもサッと寄ってきたので、「やってみるか？」と声をかけてみたが、予想した通り「怖い。」という反応であった。「大丈夫だから。」と一つ餌を交換してみせると、二個目は一緒に手に持って巣の中に置くことができた。

それ以来、家に帰ると「スズムシの世話、やろう。」ととてもやる気で誘ってくるようになった。こんな経過から自然と夏休みのお手伝いになった「スズムシの世話」。孫にもやりがいのある楽しいお手伝いになっている。



パリオリンピック バレーボール男子（8/6）

連日、熱戦が続く日本選手の健闘についてガッツポーズにも力が入る。早田選手の痛めた左腕での銅メダル、最後の一打まで緊張した松山選手の銅メダル等々。そして迎えたバレーボール男子。予選リーグでは前評判らしからぬ試合が続く、「オリンピックにのまれたか。」と「こんなはずでは。」のザワザワ感で迎えたイタリア戦。そんな不安を完全に払拭した一戦になった。この日の石川選手はちがった。高橋選手はレシーブで何度も沸かせてくれた。西田選手もいつものパフォーマンスで盛り上げてくれた。世界を目指してきた仲間が一つになって最強の敵に立ち向かう姿が心を躍らせた。「あと1点」「もう1点」何度も画面に向かってこぶしをにぎったことか。最終盤のイタリア選手の必死の形相からもこの試合にかける負けたくない思いが強く伝わってきた。その分、余計に最高の試合になったのだと思う。こういう試合を見ると日本で良かったなあと思う。ただただ「ありがとう。」と言いたい。